

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財) 第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区
夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494

第五福竜丸の ペンション展開く

十一月一日から第五福竜丸展示館で「第五福竜丸のペンション展—ラッキー・ドラゴン 船体への投影」がはじまりました。会期は十二月一日まで。

「第五福竜丸とペンションのラッキードラゴンをぜひ一度合わせたい」との長く切なる願いを、展示館開館20周年にあたって実現させたもので、福島県立美術館、丸沼芸術の森、ギャラリー・アート・ポイントはじめ絵を所蔵される関係者の協力と激励を受けて開かれました。

開催日の前々日、美術品運搬の特別車で遠く福島から届けられた二メートルを越す「ラッキードラゴン」を県立美術館学芸員伊藤匠さんの立ち会いで、船体に接するよう設置し、ベッドに腰を下ろす久保山さんの視線が第五福竜丸をとらえたとき、いいようのない感動が走りました。船の保存に力を尽くした東京建設従業員組合の石原由雄さんが時間をかけてしっかりと取り付けました。素描作品

第五福竜丸の生みの親
南藤藤夫さん逝く
十一月三日、和歌山県古座で死



船尾で作品を描く黒田征太郎さん(右)と山辺ひろのぶさん(左)

16点の展示も、企画の全てに情熱を傾けた若いスタッフを、ながい美術の永井明さんが、何回も足を運び専門家としてのアドバイスをし、開催にこぎつけました。
和田誠さん、窪島誠一郎さんはじめ八名の方が思いを語ったパンフレット(B5判16ページ)、ポストカード(8枚一組)も完成。マスクコミ各紙、テレビにも紹介され関心が高まっています。グラフィックデザイナーの黒田征太郎さんも前日かけつけ、船を描き、展覧会への期待を語り、激励しました。

く賑わっていた。何人かのカップルがいた。暫くしてどこかの中学生らしき学生が団体で館内にどつと繰り出した。一人一人学生達が彼にどのような思いを馳せ、どのような会話を交わしたのかは私自身、知る由も無いが、少なくともこれだけ賑やかさに満ちた館内は初めてだった。先の坊やの写真の手前に小さな机と椅子二脚程が置いてあり、感想ノートが置いてある。中学生数名が書いていった。何を書いたのかとめくってみたら期待外れの感想。たわいのない意味の無い落書きもあった。展示館関係者が見たらがっかりするだろう。そんなことを考えたらそのスペースに書く気が失せ、そこから数行空白を取り、ペンを手にして綴った。綴っている様を坊やに覗かされた。緩やかな雰囲気を感じ取りながら。「また来ました。こんな大勢の見学客に囲まれた第五福竜丸の姿を見たのは初めてです」いつの間にか周囲に先ほどの中学生達が取り囲み、私の感想を口に出している。「この人何回も来てるんだ」呟きが聞こえた。

でも持つてくるべきだったか。肩に掛けていた黒のリュックの外ポケットと中の本体を開けて探したが出てくるのは腕時計や財布と、ろくに化粧もしないのに無造作に押し込んだファンデーション。本体には読みかけの本と書き途中の原稿用紙の山が突っ込んであるだけだった。その隙間に差し出し予定の郵便物が茶封筒に収まっている。判ってはいたが今一度宛名を確認する。送り先は広島に住む友人であった。草だらけの中、一輪のコスモスを見つけた。秋だなぁ。ぼきりと手折って手に取り眺めた後、胸元のブラウスにでも飾ろうか、それとも帽子に飾ろうか、いや、そもそもコスモスを手折って手にした目的はそこの為では無かった。一步、また一步足を進めて、石碑に近づいていく。「原水爆の被害者は私を最後にして欲しい。久保山愛吉」。ささやかな献花。扇子を要するまでに暑かった私の身体が冷めた。空は澄み渡り秋風が吹き抜けていった。夢の島、決してユートピアではないけれど、展示館だけは素敵なデイトスポーツになるに違いない。どうせ好きになるのなら、同じ思想を抱く異性がいい。密かにかんじながら、そこを後にした。

科学と平和の問題を考える秋

川崎 昭一郎

文化の秋、芸術の秋、そして平和の秋。

八年前の国連総会は、第一次世界大戦終了日である十一月十一日を含む週を「科学と平和・国際週間」と定めました。

ことしは十一月十一日(月)から十六日(土)までが国際週間となります。国内での参加呼びかけ文はつぎのようになっています。

「科学からみて『これが平和への道だ!』とさっそうと指し示すことのできる人はいないでしょうが、少なくとも人々の平和な生活と密接にかかわる『科学の問題』『技術の問題』は何なのかを考える『くせをつける』ことは大切です。この週間がそのきっかけとなるように、とくにこれからの地球を担う若い科学者・技術者の参加がえられるように、各地で行事を工夫して下さい。呼びかけます。あなたが科学者ならば、同僚の人々に声をかけ、科学と平和の問題を考える研究会、講演会、その他の行事を企画して下さい。あなたが市民なら、科学者と連絡をとって行事を企画して下さい。」

包括的核実験禁止条約(CTBT)がようやく国連総会で採択されました。

水爆実験の恐ろしさをはじめ世界に知らせ、核兵器の廃絶か、人類の破滅かの二者択一を私たちに突きつけたのは、一九五四年三月一日のビキニ事件でした。

ビキニ実験で被災した第五福竜丸とかわって、四十余年にわたり原水爆実験禁止と原水爆禁止を一体のものとして求めつづけてきたものひとりとして、私は、すべての核爆発実験が例外なく禁止されたことを重く受けとめています。

もちろん、CTBTだけで核兵器の開発が完全にとまるとは考えられません。

最近では、理論、実験とともに計算実験が第三の研究手法として確立しています。コンピュータの上での模擬実験を利用する方法は各分野でひろく採用されており、核兵器も例外ではありません。

核兵器保有国は、これまでの核爆発実験をつうじて、模擬実験のものに必要なデータを十分に貯えていると考えられます。したがって、質的に新

しいものは別として、模擬実験でカバーできる範囲での核兵器の進歩は今後もありえます。

このことは、私たちが気をゆるめることなく、核兵器廃絶への努力をさらに強めなければならないことを示しています。

第五福竜丸展示館は本年、開館二十周年を迎えています。これを記念し各方面の協力を得て、いま展示館内でペン・シャーン展が行なわれています。

ペン・シャーン(一八九八—一九六九)はリトアニア生まれで、今世紀のアメリカを代表する画家の一人です。日本にも長く滞在し、第五福竜丸事件を主題にした連作も描いており、私たち日本人にも親しみがもてる画家です。

ペン・シャーンは社会と人間の現実にたいへん向かい、差別、迫害、亡命、貧困、戦争など彼自らも体験した問題ととりあけながら、つねに人間への愛情と希望の灯をともしつづけてきました。

五年前、都内で開催されたペン・シャーン展をみたときに受けた感銘を、私は今でも思い出します。

十一月中にぜひ一度、第五福竜丸展示館を訪ねられ、船体とともにペン・シャーンの『ラッキードラゴン』からのメッセージを心にうけとめ、原点への思いをよみがえらす秋を味わっていただくことをおすすめします。

(第五福竜丸平和協会会長)

湯川、朝永博士らが核抑止論を批判

—パグウォッシュ会議の成果と課題(2)—

小川 岩 雄

パグウォッシュ会議は一九五〇年代から六〇年代にかけて急速に発展し、世界各地で多くの科学者の支持を集める一方、各国、とくに米ソの政治指導者や国防当局者への影響力が次第に強まった。

その結果、部分的核実験禁止条約(P.T.B.T.)や核兵器不拡散条約(N.P.T.)など、米ソの協調に基づき軍備管理の取り決めが会議の提言で次々に実現したが、問題の核軍備競争は一向に減速せず、むしろ激化する一方であった。

実際一九五八年頃には米ソ合せて一万発足らずだった核弾頭の保有量は、十年後には約四万発、さらに十年後には六万発にも達したと推定されている。また核弾頭を運ぶミサイルや原潜、そのための指令伝達手段なども目ざましい進歩を遂げた。

軍備管理の取り決めが軍備競争の阻止に全く役立たなかったのはなぜか。その原因の解明にいち早く取り組んだのは、湯川、朝永両博士ら日本のグループだった。

とくに朝永博士は、日本からは誰も参加しなかった第二回パグウォッシュ会議(五八年、カナダ)の分厚い議事録が届いたとき、その収録論文に即座に注目し、早速若手の物理学者数人を呼び集めて勉強会を始めた。

この勉強会はほぼ毎週、立教大か教育大の研究室で開かれ、当時教育大朝永研の故福田信之君(元筑波大学長)や千葉大の川崎昭一郎君(現当協会会長)など新進気鋭の研究者が熱心に参加した。筆者も毎回出席し、わが国ではまだほとんど知られていなかった核抑止論の考え方の理解や、問題点の整理に熱中した。論文で *death* (思い留まらせる、抑止する)、*invulnerable base* (不死身の基地) など、耳慣れない語句に出合うたびに「どういう意味だ」と皆で議論するなど、文字通り「核問題事

始め」の風情(ふぜい)だった。朝永博士が後に展開された明快で先鋭な核抑止論批判は、この討論の中で生まれたのである。

今ではよく知られているが、核抑止論とは、核兵器はすぐにはなくならず、また一度発射された多くのミサイルの完全な防衛は実際上不可能であるとの前提の下に、核兵器による報復の意図と能力を相手国に示すことによって、相手国に核ミサイル発射の意図を「思い留まらせ」(抑止)しようとする戦略思想をいう。

冷戦下のように有力な核保有国が米ソ二国だけで、両国に同程度の十分強力な核戦力があるとき、一方が万一方の先制核攻撃(核第一撃)を受けたら、必ず相手に「耐え難い」報復核攻撃(核第二撃)ができるようにしておけば、両国とも報復を恐れて第一撃を控えるはず、と核抑止論者はいう。

しかし朝永博士らが指摘したように、現実には両国とも自国の劣勢と相手の優位を恐れ、絶えず核戦力の増強を続けるから、軍備競争の激化がどうしても避けられない。また、核先制攻撃を受けた側がすぐに報復攻撃をするには、相当数の核ミサイルが「生き残る」

必要があるが、核兵器の直撃に耐えられる発射基地などは実際上あり得ないし、潜航中にミサイルを発射できる原潜にしても、通信・指令などが麻痺(まひ)すれば第二撃は不能となるので、抑止は結局成り立たない。

さらに、核拡散が進んで核兵器を持つ国が増え、例えばその一國が潜航中の原潜から先制核攻撃の闇討ちを行ったとすると、発射国が不明のため核報復は難しい。

なお核兵器体系の巨大化や複雑化は誤作動の確率を高めて偶然戦争や誤算戦争を招く恐れがあり、軍事費の異常な肥大や軍需産業の偏重は経済を破綻させるだろう。

このような分析から、米ソが大量の核兵器を保持して核抑止戦略を進める限り、どんな軍備管理協定もたかだか東西の緊張緩和に役立つだけで、軍備競争の阻止には全く無力であることが分かった。

では核抑止論を乗り越え、核廃絶、さらには全面軍縮を実現するにはどうすればよいのか。その方法を探るため、湯川博士らは一九六二年五月、著名な社会学者や作家も含む「科学者京都会議」を開催し、包括的な討議を試みた。(立教大学名誉教授・協会理事)

再会 第五福竜丸展示館にて

夏目 佑子

東京駅からJR京葉線に乗って千葉方面に向かう。始発から数えて五つ目が、新木場駅になる。潮見から地上に出るのだが、暗闇の様な地下から地上に出て、眼前に見渡す東京湾の表面上は、晴れた日には水面に太陽がきらきら輝きともきれいだ。新木場駅を降りると何となく騒々しいゴミ臭い雰囲気漂ってくる。線路下の高速道路に都の清掃車の車が何台もひっきりなしに行き来しているのを見る。信号待ちをしていると車の振動を微かに感じる。公害の一つ——振動——という手はこのことだろう。どこか通り過ぎる車はかなりのスピードを出していかも何とも表現し難い音を立てて去っていく様にも思える。

夢の島、初めてその夢の島の名を聞いた時、私は、何と響きのあたたかい名前なのだろう、と感動した。そしてユートピア的な幻想を抱いた。夢の島というのだから桃源郷の様な、うっとりする場所に違いないと。そして何時か恋人が出来たら二人のデートスポットにしようかと。ところがそうした

幻想をぶち壊したのが親父殿の一言だった。お前それ本気で思っているのか。夢の島ってのは東京都のゴミ処理場のことなんだぞ。親父殿の何気ない一言。忠告とも受け止められるその一言に私はひどく不愉快になったのだが、実際に夢の島の写真を見た時、ええっ、これが本当の素顔なの?!と我が目を疑った。

そのゴミの島、夢の島に私は今居る。誰とも知れない多くの都民が出したゴミの島で、一人泣く漁船の存在を知ったのが、高校卒業後の浪人生の頃だった。

都立第五福竜丸展示館。一九五四年三月一日に起きたビキニ水爆実験で死の灰を浴びた第五福竜丸の乗組員の所持品から遺品、船体の備品に至るまでを展示・揭示している。と書かれた教育雑誌に釘付けになった。早速翌日行ってみようと、予備校での授業が一時限で終了なのをいいことに出かけて行ったが、初回は迷いにも不案内で迷った。迷いに迷ってその日は諦めた。改めて一週間後に再度出向いた。今度は不思議なことに

迷わずに行けた。館内は誰も居らずがらんとしており閑散としていた。東京にも緑があった、と安堵する様な木々の緑と、近くの総合運動場に咲き乱れる花々に囲まれて、その建物はひっそりと、こじんまりとした雰囲気の中で建っていた。

ごめんなさい。別にこんな所でこんな挨拶をする必要も無いのだが、つい口を突いて出てしまった。誰も反応が無い、当たり前だろう。もう一度言ってみることにした。ごめんなさい、と、ぎろっ

とこちを誰かが見ている。誰だろう。視線を遠くにやると、どこかでお目にかかった少年だ。おそるおそる扉を開けようとしたが開かない。よくよく注意書を読めば、左右に引いて下さい、とあるではないか。どおりで手前に引いても向こう側に押ししても開かない筈だ。左右に引くと古そうな建物でありながら油が常に差してあるのかきしむ音も無くすうっと開き私を迎え入れた。私が見ていた少年は、かつて長崎で出会った、おにぎりを持って坊やだったのだ。いらっしやい。僕、姉ちゃん来るの待ってた。ゆっくり見ていけよ、といわんばかりの表情で大判に引き伸ばされて展示されている。第五福

竜丸は被曝後、水産大学の練習船として、名前もはやぶさ丸と改名され、暫く訳の判らないまま、本来のマグロ漁船としての彼には成り得ず、役立たずの船となってゴミの島、夢の島に葬り去られていたのだという。さぞかしゴミだらけの悪臭放つ島で、彼は一人救いの手が差し伸べられるまで泣いていたのだろう。歴史の鼓動や息吹が館内に充滿していた。

最初の来訪から今年で五年になる。何回来訪したか自分でも判らなくなってしまう。何回行っても彼は色あせることなく館内に構え続け、資料は史実の重みを伝え続ける。その度に私は船体に抱かれ暫し甘い夢を見る。夢の島はゴミ島ではないんだ、第五福竜丸の住まいなんだ。ついこの間の休暇に何回目かの来訪をした。何時も行く日の天候はきままって太陽はがながんと照りつけ、どこか埃っぽく、とてもではないが東京の一部とは思えない程の悪臭と振動に包まれながら、それでも足を進めていくと騒々しさも臭いも気にならなくなる。今日も私を待っていてくれる。今日も私を待っていてくれる。うれしくなる。いつもは閑散として水を打った様に静かな館内が、その時はすこ